

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	白幡 俊輔
論文題目	軍事技術者のイタリア・ルネサンス —火器と築城術の変遷：フランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニからピエトロ・カターネオまで—		
(論文内容の要旨)			
<p>ルネサンス期のイタリア社会を理解するうえで欠けているのは、「軍事」という面からこの時代をみる視点である。戦争は人類社会に大きな被害をもたらすものであるが、その一方で人類史に多大な影響を与える要因となってきたことも否定できない。それゆえルネサンス期の社会への考察も、「軍事」や「戦争」という視点を欠かすことはできない。本論文はそうした意図に基づき、とりわけ軍事「技術」という観点から、ルネサンス期イタリアにおける戦争と社会の関係を考察したものである。</p> <p>第1章においては、15世紀末までのイタリアにおける軍隊の編成・武器・戦術を概観したのち、イタリアの「傭兵隊長<i>condottieri</i>」たちが、新しい軍事技術をもった建築家・技師を活用して、自己組織や戦術を変革しつつあったことを、当時の年代記資料などをもとに解明した。</p> <p>第2章においては、15世紀後半の画家・彫刻家であると同時に、建築家・軍事技師として名をはせたフランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ (1439-1501) の城砦設計と戦術とくに都市の防衛戦術について、イタリア各地の具体的な城砦の例を取り上げつつ、彼の戦術思想の本質を探り出そうとした。そのために、文献調査のみならず、フランチェスコ・ディ・ジョルジョが関与した現存する城砦建築の調査も行った。</p> <p>第3章においては、フランチェスコ・ディ・ジョルジョが古代ローマの建築理論家ウィトルウィウスの建築論と格闘し、それを咀嚼するなかで、軍事的合理性を追求すべく、彼の建築論の再解釈を試みたことを論じた。そしてこの再解釈を通じて、16世紀以降の築城術に影響を与えた「側面射撃」や「城壁の屈曲」といった設計思想をフランチェスコ・ディ・ジョルジョが生み出したことを明らかにした。</p> <p>16世紀においては、築城術は都市の防衛手段を超えて、国家全体の防衛手段へと変化した。そうした変化に重大な役割を果たした人物に、バルダッサレ・ペルッツィ (1481-1537) とピエトロ・カターネオ (?-1569?) という二人のイタリア人建築家がいた。第4章では、この二人がフランチェスコ・ディ・ジョルジョの築城術を受け継ぎ、さらに発展させて、火器を用いた、死角のない完全な防御を可能にした「稜堡式築城」を生み出したことを論じた。その過程で、古典理論に依拠した部分を次第に後退させ、近代的で合理的な視点から築城術を論じるような思想的变化を獲得したことを解明した。</p> <p>第5章においては、上記16世紀の二人の建築家が、城砦建設を通じて「都市」を防衛することを意図したのみならず、より高度な戦略目標として「領土」「国家」の防衛を意図していた点を指摘し、その戦略思想と、当時の政治思想家 (とりわけマキアヴェッリ) が想定していた国家防衛戦略や軍事技術に対する認識との関係を比較・検討した。またこうした変化の原因として、フランス・スペインなど当時の大国に対するイタリア都市国家の没落という現象が一面としてあったと指摘した。</p>			

以上大きく5章にわたって展開してきた分析をもとに、本論文は軍事技術の変遷が持つ歴史的意味を考察した。16世紀にいたって「築城術」は「国家の防衛」という重大な任務のもとに考察され始め、国防戦略を担う軍事システムの一翼を形成するにいたる。たとえばピエトロ・カタネオは著書『建築』*L'architettura*で論じているが、城砦によって国境線や戦略的拠点を防衛すべきか否かは、王国・帝国・新興国・共和国といった国家の政治体制によって規定されるものであるという考えを持つようになった。

本論文は軍事技術と社会の変化という問題に関連して、従来唱えられてきた「軍事革命」論（技術上の要因から社会的な変革は説明できるとする説）に対し、これに反論した説も含めて検討し、双方の説の問題点を指摘した。そしてそれぞれの説がもつ、技術に対する一面的な評価を超えた技術史独自の視点を提起した。

軍事技術とは、国家の利害や人命がかかった技術である以上、使用者によって常に可能な限り合理的に選択され、より効率的になるよう開発されてきたと考えられている。しかし本論文はそうした合理化・効率化とは一見無関係なルネサンス期のイタリア人建築家が持っていた社会的常識や思想上の規範によって、軍事技術とりわけ築城術が変化してきたことを示した。そうした点で、タイトルの「軍事技術者のイタリア・ルネサンス」が示しているように、本論文は単なる軍事史研究にとどまることなく、ルネサンスの文化や思想といった広範な内容を対象に考察を行った。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ルネサンス期のイタリア社会を「軍事技術」の観点から、総合的・多面的に考察しようとしたものである。個々の章についての評価点は、以下の通りである。

第1章では、15世紀末までのイタリアにおける軍隊の編成・武器・戦術を概観したのち、15世紀末には、火器の普及に合わせてイタリアの傭兵隊長*condottieri*が、新しい軍事技術を熟知した建築家・技師を活用して、組織や戦術を変革しつつあったことを解明したこと。次に第2章では、15世紀後半の画家・彫刻家であると同時に、建築家・軍事技師として名をはせたフランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ (1439-1501) の城砦設計と都市の防衛戦術について、イタリア各地の具体的な城砦の例を取り上げつつ、彼の戦術思想の本質を探り出そうとしたこと。第3章においては、フランチェスコ・ディ・ジョルジョが、古代ローマの建築理論家ウィトルウィウスの建築論を翻訳し咀嚼するなかで、軍事的合理性を追求すべく、再解釈を試みたことを解明したこと。さらにこの再解釈を通じて、16世紀以降の築城術に影響を与えた「側面射撃」や「城壁の屈曲」といった設計思想を生み出したことを明らかにしたこと。

16世紀においては、築城術は都市の防衛手段を超えて、国家全体の防衛手段へと変貌したが、そうした変化に重大な役割を果たした人物には、バルダッサーレ・ペルッツィ (1481-1537) とピエトロ・カターネオ (?-1569?) という二人のイタリア人建築家がいた。第4章では、この二人がフランチェスコ・ディ・ジョルジョの築城術を受け継ぎ、さらに発展させて、火器を用いて死角のない完全な防御を可能にした「稜堡式築城」を生み出したことを論じたこと。その過程で、古典理論に依拠した部分を次第に後退させ、近代的で合理的な視点から築城術を論じるような思想的变化を獲得したことを解明したこと。

最後に第5章においては、上記16世紀の二人の建築家が、城砦建設を通して「都市」を防衛することを意図したのみならず、より高度な戦略目標として「領土」「国家」の防衛を意図していた点を指摘し、その戦略思想と、当時の政治思想家(とりわけマキアヴェッリ)の想定していた国家防衛戦略や軍事技術に対する認識との関係を比較・検討した。またこうした変化の原因として、フランス、スペインなど当時の大国に対するイタリア都市国家の没落という現象があったと指摘した出来たこと。

以上5章にわたる考察によって、本論文は軍事技術の変遷がもつ歴史的意味を明示したのに加え、本論文の評価点として次の3点をあげることができる。

1、築城術などの軍事技術が、戦争や軍隊の変化をうながしただけでなく、ルネサンスの建築家や技術者に対して合目的性や客観的なデータに基づく思考法、「国土や国境線の防衛」といった近代的な思想を育むという、多面的な役割を果たしたことを指摘したこと。

2、一般に、軍事技術は合理性や効率性を追求することで発達してきたと考えられるが、ルネサンス期ではそうした合理化や効率化とは一見無関係な社会的常識や思想上の規範によって軍事技術が考察され、変化したことを解明したこと。とくに近代に向かって築城術が変容していく過程において、ルネサンス期の建築家による古典理論の受容や再解釈が果たした役割が大きかった事実を指摘したこと。

3、近代的な城砦設計である「稜堡式築城」の誕生に関して、イタリア人建築家の担

った役割を、建築書と現存する建築物の双方を分析し、建築家のもっていた戦術思想にまで踏み込みながら、具体的かつ緻密に検証したこと。

その一方で、以下のような問題点もある。

1、ルネサンスから近代への変化を論じるという、本論文の大きな枠組みにおいては、イタリア以外の地域（フランス・スペイン・ポルトガルなど）の事例や人物が取り上げられるべきであるし、時代的にもバロック時代を視野におさめる方がより適切であること。

2、第4章から第5章にかけて論じられている16世紀の建築家の思想について、彼らが本当に近代的な国家観や戦略思想を持っていたのか疑問が残るので、その点についてより説得的な論証が必要なこと。

3、軍事技術における進歩史観への批判が、本論文の基調となっている。その主張については首肯できるものの、そうした既存の歴史観の枠組みにとどまらず、筆者独自の観点にもとづく軍事技術への評価を望みたい。

このような問題点はあるものの、本論文は博士論文として十分な内容と水準を備えていると認められる。以上を総合して、本論文は博士（人間・環境学）に値するものと判断する。また、平成22年1月19日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降